



Title	韓国と日本 宗教文化交流の諸相
Author(s)	櫻井, 義秀
Citation	中外日報, 7-7
Issue Date	2007-01-13
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/35234">http://hdl.handle.net/2115/35234</a>
Type	column (author version)
Note	中外日報2007年1月13日掲載
File Information	sakurai-11.pdf



[Instructions for use](#)

## 1 カルト問題と宗教文化の葛藤

2006年12月9日、北海道大学において「韓日宗教文化交流—研究の現状と課題」と題し、韓国側から6名、日本側から6名の宗教研究者が討議を行なった。この研究集会は、文部科学省の「魅力ある大学院教育イニシアチブ」に採用された「人間の統合的理解のための教育的拠点研究」の一環として開催された国際ワークショップである。

既に、中外日報（2006/12/14）において、第一部・第三部の内容が報じられている。プログラムからもおよそその発表内容を推察いただけるものと考えるので、本稿では、宗教文化交流における土着化の問題だけを考えてみたい。

筆者は特定教団による違法な勧誘・教化、資金調達活動をカルト問題として研究してきた。近年、人権侵害に加えて、異なる文化や社会層相互の葛藤といった宗教文化の次元においてカルトを考える必要性を感じている。最近のカルト事件でいえば、聖神中央教会の金保牧師（女性信者への性的暴行により懲役20年）は、韓国のキリスト教福音派に強く影響を受けていた。鄭明析（女性信者への暴行容疑で韓国警察が国際指名手配）率いる摂理（キリスト教福音宣教会）の日本伝道は、現在、大学を悩ませている。鄭明析が教理的影響を受けた統一教会は、正体を隠した伝道や靈感商法によって40年来の社会問題である。

こうした韓国の福音派や異端的キリスト教が在日コリアン社会のみに広まっているのであれば、日本ではこれほどの問題にはならなかった。統一教会で言えば、靈感商法の被害総額はこの二〇年で九〇〇億円を超えており、多くの日本の青年や主婦が動員された。摂理も二千名近くの日本人信者がいるといわれる。韓国出自の、キリスト教の正統とはいえない宗教団体が、日本社会で葛藤を伴いながらも宣教に成功したが故の社会問題である。

## 2 宗教文化の移入と受容・抵抗

宗教文化は、元来、特定の歴史的・地政学的な背景を有する。そのために植民地主義により覇権国家の宗教が導入されたり、グローバリゼーションによって移民者や教団が宗教文化をホスト社会に持ち込んだりする時には、地元の宗教文化との関係が問題になる。土着化するまでには葛藤の経緯もあろう。

キリスト教は近代啓蒙主義や欧米国家の力によって文化的優越性を認められたために、19世紀後半から韓日共にハイ・カルチャーとして受け入れられた。日本におけるキリスト教信者人口がパーセントを超えないのはその所以であるが、他方、韓国では解放前後の苛烈な歴史のなかでキリスト教が独裁政権への抵抗運動や悩める大衆に広範に浸透し、国民の四人に一人がクリスチャンとなった。半世紀に及ぶ日本帝国主義支配下に成立した朝鮮の民族宗教には、歴史的苦難への恨を裏返しにしたナショナリズムが色濃く残っている。

解放後の韓国では、反日的愛国心により植民地期に移入された日本宗教は批判されたと

いう。日本の諸宗教は残ることも新たに伝道することも難しい状況が続いた。韓国における日本の新宗教信者は、日本で入信して帰国した韓国人が主であり、韓国人により日本で布教された天道教・甌山道・円仏教等の新宗教や在日大韓基督教会は、在日コリアン社会に信者が限定される傾向にあった。一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて誕生した日本の民衆宗教・韓国の民族宗教は、どちらも民族的な世界観や歴史的経験を教えに含み込んでいたので、そのままの布教方法ではエスニック・コミュニティの域を超えた布教が難しかったのである。

ところが、この二、三〇年間に大きな宗教文化交流があった。一つは、先に示した韓国のキリスト教系宗教の日本宣教であり、もう一つは、日本新宗教の韓国布教である。現在、日本の新宗教一八教団のおよそ二〇〇万人を超える信者が韓国内で活動している。創価学会は一四〇万人の信者を有する。韓国内の仏教、プロテスタント、カトリックに次ぐ第四の宗教勢力が日本の新宗教なのである。根深い反日感情があるなかで、なぜ、これほど韓国社会に受容されたのか。また、先に述べた韓国の福音派や異端がなぜ近年、日本で勢力を拡張することができたのか。この二つの問題を併せて考えようというのが、韓日宗教文化交流研究のねらいである。

韓国側は既に大規模な日系宗教の教団調査が済んでいるが、日本側の韓国系宗教の調査はこれからである。以下では、主流派ではない教団の研究から日本におけるキリスト教の土着化を考察した二冊の良書を参考にして、アイデアのみ書き留めておこうと思う。

### 3 宗教文化が土着化に成功する条件

マーク・マリズは『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』（トランスビュー、二〇〇五）において、キリスト教倫理の修養化（内村鑑三の無教会や松村介石の道会）、洗礼の先祖祭祀化（イエス之御霊教会の身代わり洗礼）、シオニズムと日本の霊性の接合（原始福音・基督の幕屋）等、土着化の工夫を考察している。他方、池上良正は『近代日本の民衆キリスト教』（東北大学出版会、二〇〇六）において、大正・昭和にリヴァイバルを経験した中田重治率いる初期ホーリネス教団に着目した。聖霊派の聖潔・神癒・再臨信仰という宗教的ラディカリズムが中下層の民衆から支持されたという。宗教文化が土着化するためには、ホスト国の宗教文化と接合を図りながらも、宗教伝統の原型を保ち、ホスト国社会の特定の社会層が欲している文化的刺激を与え続けることが重要なのである。

統一教会や摂理、キリスト教福音派の強さは、伝道・教化方法の特異性（欺し・強引さを伴うことも）と宣教方針（青年層と中高年女性が対象）に加えて、教義・儀礼に含まれるラディカリズムそれ自体の魅力もあるのではないか。宗教的な原理主義は、自然の情緒や間柄の道徳に慣れ親しんできた大方の日本人から違和感をもたれるのであるが、青年や苦難の淵にたたずむ中高年の人々には救済宗教と映るのかもしれない。

もう一つ、土着化成功の要因として、ホスト社会に適合的な宣教方法・教団の社会活動も挙げられよう。人的コネクション、資金等布教に必要な資源をどのように調達し、布教

を制約する政治的介入や文化表現の制限等にどう取り組んだのか。宗教文化の移入に関わる政治的機会構造に関しては、今後の日韓共同研究の成果が待たれるところである。

#### 韓日宗教文化交流 国際ワークショップ

櫻井義秀(北海道大学)

韓日宗教文化交流における葛藤からめぐみへ

#### 第一部

李 元範 (東西大学)

韓日における新宗教の伝播と土着化

林 泰弘 (成均館大学)

韓国に於ける日系宗教の現況と展望

韓国新宗教の日本布教の現況と展望

弓山 達也(大正大学)

コメントー日本の新宗教研

究から

#### 第二部

韓日新宗教の布教と地域社

会

梁 銀容 (円光大学)

韓国円仏教の日本布教の現況と展望

趙 誠倫 (済州大学)

在日コリアンの宗教一調査の方向と課題

田島 忠篤 (天使大学)

コメントー日本の宗教社会

学から

#### 第三部

韓国宗教の宣教活動と「カルト」問題

申 光徹 (ハンシン大学)

韓国 キリスト教の日本布教の現況と展望

李 進龜 (湖南神学大学)

統一教ー日本布教の現況と

展望

川又 俊則 (鈴鹿短期大学)

コメントー日本のキリスト教研究から

中西 尋子 (関西学院大学)

コメントー日本の「カルト」問題研究から

土屋 博 (北海学園大学)

宗教文化交流研究の課題